

使徒の働き19章1-7節 「信じた時、聖霊を受けましたか」

1A 聖霊を受けていなかった弟子たち 1-2

1B アポロの働きの引継ぎ 1

2B 信じた後の聖霊の注ぎ 2

2A 二つのバプテスマ 3-5

1B ヨハネのバプテスマ 3-4

2B イエスの名によるバプテスマ 5

3A 聖霊のバプテスマ 6-7

1B 異言や預言の印 6

2B 十二人の弟子 7

本文

使徒の働き 19 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 18 章まで来ました。今朝は、1 節から 7 節までを見てみたいと思います。午後に、8 節以降を読みます。まず、通しで 7 節まで読んでみましょう。

¹ アポロがコリントにいたときのことであった。パウロは内陸の地方を通過してエペソに下り、何人かの弟子たちに出会った。² 彼らに「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」と答えた。³ 「それでは、どのようなバプテスマを受けたのですか」と尋ねると、彼らは「ヨハネのバプテスマです」と答えた。⁴ そこでパウロは言った。「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」⁵ これを聞いた彼らは、主イエスの名によってバプテスマを受けた。⁶ パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりした。⁷ その人たちは、全員で十二人ほどであった。

今朝は、「信じたとき、聖霊を受けましたか」という説教題でお話しします。私たちキリスト者は、父なる神についてよく知っています。御子イエス・キリストについてもよく知っています。けれども、聖霊については、あまり知らないのではないのでしょうか？それもそのはず、イエスご自身が聖霊の働きは、ご自身のことを証しすることなのだということです。「ヨハ 15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証してくださいます。」ですから、聖霊が力強く働かれる時は、イエスご自身のすばらしさ、その力、ご性質が私たちに明らかにされます。そして、イエス様が願われているように歩む力を与えます。イエスという方が、自分にとって遠い存在ではなく、まさにすぐそばにおられる方、うちにおられる方、自分を通して働かれる方になります。主ご自身がリアルになるのです。

けれども、そのために、聖霊ご自身がその働きをされているのだということを忘れてしまいます。それで、ともすると、ここの弟子たちと同じように、聞いていなかった、というほど、聖霊ご自身について意識なくなる、その御力を信じなくなっている落とし穴にお散ります。聖霊の力なしで、イエスご自身について行けないことは、私たちは、福音書の中で弟子たちがイエス様についていった歩みで、どれほど失敗し、躓いたか。イエス様の十字架への道では、皆が見捨て、途中でついで言ったペテロは、女中などが問い質した言葉で恐れをなし、主を三度も、知らないと言いました。ですから、私たちのすべてのキリスト者としての歩みが、聖霊が働き、導かれているからなのだと、いうことを改めて、思い起こす必要があります。

1A 聖霊を受けていなかった弟子たち 1-2

1B アポロの働きの引継ぎ 1

¹ アポロがコリントにいたときのことであった。パウロは内陸の地方を通過してエペソに下り、何人かの弟子たちに出会った。

前回、私たちは 18 章にて、アポロがエペソにいた時のことを読みました。思いだすために、もう一度、読みましょう。「24 さて、アレクサンドリア生まれのアポロという名の、雄弁なユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。25 この人は主の道について教えを受け、霊に燃えてイエスのことを正確に語ったり教えたりしていたが、ヨハネのバプテスマしか知らなかった。26 彼は会堂で大胆に語り始めた。それを聞いたプリスキラとアキラは、彼をわきに呼んで、神の道をもっと正確に説明した。」この出来事があってから、アポロがアカイアに渡りたいと願いました。それで、兄弟たちは、それはいい！とのことで手紙を渡して、彼がアカイアにある教会で受け入れられるように配慮したのです。そのアカイア地方にコリントがあります。かつて、パウロが宣教をして、教会が建てられたところです。

交替するかのよう、パウロが後からエペソに来ました。パウロは、前回エペソを訪問した時、船の乗り換えの時間だけエルサレムに行き、シリアのアンティオキアに戻りました。しばらくそこにいて、それから第三次宣教旅行を開始するのです。ガリラヤの地方を通り、それから西にフリュギアを通りました。コロサイの町などがあるところです。そして、パウロはさらに西に行きます。エペソに行くのは、整備されたローマ街道に行く南側の道もあるのですが、パウロは険しいけれども近道である内陸の地方を通ったようです。それでエペソに入ります。エペソの町全体のことについては、午後礼拝で詳しく話したいと思います。

そこで、「何人かの弟子たちに出会った」とあります。つまり、アポロの宣教によって、キリストの弟子になった者たちです。しかし、大きなことが抜けていました。聖霊の力です。使徒の働きは、全て、イエス様が、父からの約束として、聖霊のバプテスマをあなたがたが受けますと言われて、その力によって地の果てまで、イエスご自身の証人となっていった記録です。「1:5 ヨハネは水でバ

プテスマを受けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを受けられるからです。」そして、「1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」アポロの語っていた言葉は、正確だったのですが、ヨハネのバプテスマしか知らなかった、とあります。プリスキラとアキラが、彼に神の道をもっと正確に説明しました。それが、この聖霊の力でした。

2B 信じた後の聖霊の注ぎ 2

² 彼らに「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」と答えた。

ここで、とても大切な発言をパウロはしています。もし、信じた時、必ず聖霊が与えられるのであれば、このような発言はしないということです。信じた時とは別個の、あるいはその後で聖霊が降り注がれるということです。

これまでも、私たちは見てきました。弟子たちは既にイエスを信じ、この方の復活も目撃しました。信じていたのです。けれども、イエス様がエルサレムに留まって、父の約束を待っていないと書かれました。それで聖霊が降り注がれました。そして、ピリピがサマリアで宣教の働きをした時のことを思い出しましょう。彼は、神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えて、またバプテスマも受けていました。ところが、ペテロとヨハネがエルサレムの教会から遣わされます。理由を、ルカはこう記しています。「8:16 彼らは主の名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだ、彼らのうちのだれにも下っていないからであった。」信じて、それからバプテスマを受けていますから、そこで救われているのです。けれども、聖霊がまだ下っていないと判断しました。

ですから、信じることと、聖霊が降るということは別個なのです。けれども、信じることによって、御霊によって生まれ、御霊が自分の内に住んでくださるということとは別です。ここで混乱してしまうのは、聖霊と私たちの関係には段階があるということです。信じているのに、聖霊を受けていないというのは、聖霊が内に住んでおられないということではありません。信じたらば、御霊がすぐに新たに生まれさせ、神の子供としてくださいます。そして、信者の内に住んでくださるのです。しかし、それだけでなく聖霊が上から臨まれ、また内から溢れ出てくださる関係とはまた別なのです。

しばしば、これをギリシア語の前置詞の違いで説明します。「14:16-17 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてください。17 この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。」もう一人の助け主とは、聖霊のことです。この方が、「あなたがたとともにいるようにしてください」。けれども、共におら

れるだけでなく、「あなたがたのうちにおられるようになる」とも言われます。

共にいるというギリシア語の前置詞は、パラです。この関係は、今も世に対してあります。つまり、「16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにされます。」という働きです。キリストの十字架を、明らかにされます。それによって、悔い改め、イエスを信じなければいけないと悟らせます。そして、信じれば、内に住んでくださいます。内は、エンと言います。「1コリ 3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」聖霊が住んで下さり、神を父と呼ぶことができるようにして下さり、私たちの生活を導きます。けれども、もう一つの前置詞が、エピです。「上に臨む」という意味です。「1:8a しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。」聖霊が上に臨まれるということで、その働きは外に向かいます。イエスの証人となるというものです。

このように、聖霊が内に住まわれるだけでなく、あふれ出て外に向かう働き、内的なものだけでなく、周囲の人が、確かにイエスは生きておられると認めることができる働き、それが、聖霊と私たちの間にあるエピの関係です。イエス様はそれを、溢れ流れる生ける水として喩えられました。「ヨハ 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

パウロが、「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねたのは、もしかしたら、聖霊の実が見当たらなかったからかもしれません。信じたけれども、外側にその信じた証しが見受けられないと思ったのかもしれませんが。ガラテヤ 5 章には、パウロが御霊の実について、次のように述べています。「ガラ 5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」この箇所は、実は一つだけの文法になっています。分かり易く訳すと、「御霊の実は愛であって、それは喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」というような感じになると思います。愛が、聖霊の現れの最も大きなもので、愛の特徴について、喜び、平安というものがあるということです。イエス様のように生きたい、この方が私たちを愛されたように、自分も愛する人になりたい。けれども、まるでそうっていない。そういった葛藤の中で、聖霊の力が必要なのです。

2A 二つのバプテスマ 3-5

1B ヨハネのバプテスマ 3-4

³「それでは、どのようなバプテスマを受けたのですか」と尋ねると、彼らは「ヨハネのバプテスマです」と答えた。⁴そこでパウロは言った。「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」

アポロは、後に自分の語っている内容を修正しました。プリスキラとアキラが説明したので、アカ

イアに行くからは、より正確にイエスのことを語っていました。しかし、その前に聞いていた、これらの弟子たちは、ヨハネのバプテスマしか知らなかったというのです。ヨハネのバプテスマは、パウロがここで言っているとおり、メシアであるイエスが来られるのだから、悔い改めに応答するバプテスマです。ルカは、福音書でこう書き記しています。「3:7-9 ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。9 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」まるで火を噴くような呼びかけです。神が御怒りを現わされる。悔い改めるといふならば、口先ではなく、真実を持って悔い改めなさい。悔い改めた実が見えるようにしなさい。さもないと、切り倒されて、火に投げ込まれると言いました。バプテスマというのは、そこに自分を一体化させることです。水の中に入るのは、その水が悔い改めを表しています。浸ることによって、自分は悔い改めた人間であることを示しているのです。

けれども、ヨハネは、この悔い改めはイエスを信じるためなのだとすることも話していたのです。続けてこのように説いていました。「3:16 私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。」自分はこのように水でバプテスマを授けているが、イエスご自身が聖霊によってバプテスマを授ける時が来ると告げていたのです。ですから、イエスを信じ、信じる者が聖霊によって浸されると告げていたのです。アポロが教えていなかったのは、ここの部分でした。いや、教えていたかもしれないけれども、事実、聖霊がエルサレムで弟子たちに下り、その力によって宣教をしていたというところまでは知らなかったのでしょう。

2B イエスの名によるバプテスマ 5

⁵これを聞いた彼らは、主イエスの名によってバプテスマを受けた。

ヨハネのバプテスマは、悔い改めのバプテスマでした。けれども、イエス様は復活されて、弟子たちに、父、子、聖霊の名によってバプテスマを授けなさいと命じられていました。「マタ 28:19 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け」と言われました。バプテスマという言葉自体は、「浸す」とか、「漬ける」という意味しかありません。ですから、コリント第一 10 章には、モーセにつくバプテスマをイスラエルの民が受けたことをパウロは話しています(10:2)。

つまり、イエスの名によるバプテスマとは、イエス様の働きに自分を漬ける、という意味です。イエス様が、バプテスマを受けて、その時に聖霊が鳩のように降りて来て、天から、父から、「これはわたしの愛する子。」という声がありました。その三位一体の神の名によって、バプテスマを受ける

ということです。その方との交わり、その方との働きに自分たちも関わる、結びつくということです。

3A 聖霊のバプテスマ 6-7

1B 異言や預言の印 6

⁶パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりした。

サマリアで、信者たちが聖霊を受けた時も、ペテロとヨハネが手を置いた時でした(8:17)。パウロとバルナバが宣教に聖霊によって遣わされた時も手を置かれました。パウロと長老たちがテモテに手を置いた時に、預言によって、神の賜物が与えられたことをパウロがテモテへの手紙で話しています(Ⅰテモ 4:14、Ⅱテモ 1:6)。私たちも、ぜひ、手を置いて祈ることをやってみましょう。癒しのため、導きのため、そして聖霊を受けるためです。

そうすると、聖霊が臨んで、異言を語ったり、預言を語ったりしました。五旬節で、弟子たちに聖霊が降った時に起こったことが、繰り返されています。使徒ペテロは、それが、預言者ヨエルが語ったことなのだ、と話していました。すべての人に御霊が与えられ、息子や娘は預言し、老人や夢を見て、若者は幻を見る、といったところです(使徒 2:17)。そしてペテロは、「2:39 この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」と言いました。その証拠に、サマリアで、ペテロとヨハネが手を置いた時に、異言や預言のことは書いていませんが、魔術を行っていたシモンが、目で見える形で何かしるしが伴ったのを確認したのでしょう。そして、コルネリウスとその一家は、「異言を語り、神を賛美するのを聞いた」とあります(10:46)。そして、今、異言を語り、預言を語っています。聖霊のバプテスマの本質は、イエスを証しすることですが、しかし、ヨエルの預言のように、すべての人に御霊が注がれたしるしとして、異言や預言が伴うこともあることが、よく分かります。

いや、これは一過性のものだ、使徒の働きにしか記されていないと書いてある注解書がありました。これ、間違っていますね。福音書には、マルコ 16 章に、新しい言葉を語るとあります。使徒の手紙では、パウロがコリント第一で詳しく、異言と預言の賜物について指針を与えています。12 章から 14 章です。ここでは、異言と預言があるかないかについて議論されていません。それをどのように教会で用いるのか？ということについて話しています。乱用があったのです。最も大切なのは愛なのだ、ということです。異言の賜物、預言の賜物については、それぞれ大切な神の賜物ですが、それは、以前、じっくりと聖霊シリーズの学びで学んだことがあります。

2B 十二人の弟子 7

⁷その人たちは、全員で十二人ほどであった。

パウロの、エペソにおける初めの働きです。興味深いことに、十二人だということです。神がイスラエルを選ばれた時に十二部族いました。イエス様が弟子たちを選ばれた時に十二弟子がいました。エペソにおいて、聖霊のバプテスマを受けた初めの弟子たちが十二人いました。ここから、著しい聖霊の働きが起こることを予期しているかのようです。それは、午後に見て行きましょう。

もう一度、私たちに当てはめましょう、パウロのエペソの人々に対する問いかけです。「信じたとき、聖霊を受けましたか」。聖霊を受けるといことは、イエス様のように生きていく、その力と活力が与えられているということです。本当は、キリストに倣う者としてこうありたいのに、全くそうになっていないという呻きがあれば、以下のイエス様の約束に目を留めましょう。いや、命令ですね。「求めなさい」です。「ルカ 11:13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」